

東北アジア 共同の家を めざして

姜尚中 Kang Sang-jung 平凡社

ランスは、ナポレオン戦争以来、百年以上にわたって戦争を繰り返してまいりました。このドイツそしてフランスという二つの隣国がタイアップしたということが、EUという大きな統合に向かつていった大きな機関車であったことは、皆さん知つてのとおりであります。

そのためには、何が何でも日韓関係をこの独仏関係とアナロジカルなものにしていかなければならない。日本は、アメリカのみならず隣国である朝鮮半島とスクラムを組むことによって、日本一国ではできないことを朝鮮半島とともに実現できるのだということを力説しておきたいと思ひます。そのためにはどうしても、国境を越えた通信システム、なかんずく衛星放送の国際化、これが非常に大きな役割として浮上していることを申し述べておきたいわけであります。

さらには、これは情報ハイウェー構想として、玄界灘を越えて、そしてさらには朝鮮半島から北京あるいはロシアからヨーロッパへ、これは皆様も御存じのとおり、現在、北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国と韓国との間に途絶した鉄路というものが今開通しつつあります。これによつて、朝鮮半島は、シベリアからロシアを通じて西ヨーロッパにまで、陸路でさまざまな物資交流ができるような時代になるでしょう。

もちろん、今、公共事業や国家財政の破綻状況を考えていきますと、玄界灘にトンネルを掘つて、フランスとイギリスのドーバー海峡のような形で、いわばそのような交通機関、運輸シ

ステムをつくり上げるということが現実的に可能かどうかは別にしましても、いわば北海道から陸路でヨーロッパまで行けるような時代が来るかもしれないという、二十一世紀はそのような新しい時代を我々に今示しつつあるわけであります。

したがつて、北朝鮮と韓国との鉄路が開かれるということは、これは日本にとって大きなメリットがある。海を通じてヨーロッパに通じていく物流の流れと、陸路を通じて流れていく物流、人の交流というものは、コストがいかに違うかということ、皆さんも知つてのとおりであります。そういう時代に二十一世紀は向かおうとしている。

こういう中で、日本は、そのような通信、情報、運輸システムのインフラストラクチャーに對してどのような援助あるいは技術的なさまざまな供与ができるのか、こういうことをぜひとも日本の方で率先して考えていただきたいと思いますと思うわけでありま

す。第二番目に、非常に難しい話でありますけれども、外交・安保システムについて私の所見を述べさせていただきますと思います。

一言で言いますならば、日本は、基軸的な安全保障システムとしての日米安保を中心とする日米関係を少しづつ対等な普通の関係にしつつ、多極的な安全保障をつくることができるのかどうか、そこに私は二十一世紀日本の外交、安全保障システムにおける最大の課題があると思ひます。